

私の奉仕活動を振り返り、私を支えてくれた皆様へ捧げる書簡

一橋大学大学院総合社会科学専攻

シム ミンソプ

窓を通り抜ける風の音が聞こえるほど静かな夜明け。日本では渥美財団の30周年イベントがこの時間帯に行われているだろう。私は小さな照明と温かいお茶を親しみながら、イギリスで過去1年間を振り返ろうとこの文を書いている。最大のイベントに参加できず残念でならないが...

2023年3月の真夜中過ぎ、眠りにつこうとしたその時、新しいメール通知音で目が覚めた。

「トルコの地震の被災地に派遣される行政家として参加できれば連絡ください。」

2023年の新年、始まりのドキドキ感に満ちていた2月、トルコとシリアは大地震に襲われた。

世界中から救援活動と支援の手がトルコに向かっていった。少しずつ温かい春の気配が冬の名残りを追い払いつつあるこの時期、家族を残しイギリスへ向かった。いつも憂鬱だと感じるイギリスの天候は、銀色の海に静かに浮かぶ街のように深い霧に覆われていた。私を待つチームは赤く染まった顔で、突然の準備に緊張感が漂っていたが、久しぶりの再会を喜んでいる様子だった。長い移動の疲れを癒す余裕もなく我々はトルコに向かった。

”惨状だった。これまでの救援活動の現場とは比べものにならないほど惨かった。”

現場を確認し、本格的な活動のために救援物資の調整のため少し離れた補給所で活動を始めた。本当に何も考えられないほど忙しい日々が続いた。ほんの少し目をつぶって仮眠だけでも取ろうとしたその時、周りで騒々しい声や悲鳴が聞こえ、血を流しながら倒れる仲間の姿が見えた。救援物資を強奪する現地の人々により大混乱になり、私たちは呆然とただ見守ることしかできなかった。

”私たちの奉仕活動はこのような人々のためだったのか。私たちの活動の意味は一体どこにあるのか。”

この疑問に答えを見いだせないまま活動を終えようとしていた頃、団体からまた別の連絡があり、団体の配慮と支援のお陰でガーナに向かった。私と妻によく懐いていた子どもが、私と妻に会いたがっているとのことだった。事故で、もう少しでこの世を去らねばならないかもしれないという悲しい知らせだった...私は疲れ切った体で飛行機に乗り、何も考えずガーナに向かった。残念ながら、私の体と心は疲労の極みにあった。しかし到着して、私の心はすぐに罪悪感に襲われ、涙が溢れとまらなかった。その小さな手には、私たちの団体の名前が書かれた読めない手紙と、私と撮った写真が握りしめられていたからだ。

”この小さな子供にとって、私は親友であり、生きる希望だったのではないか。”

「悪かった、遅くなって。もしかしたら私は君にとって人生のすべてだったかもしれないのに、ただすれ違う一時の出会いだと思ってしまい、自分の疲れた心を優先した。本当にごめんなさい」。ただただ涙を流した。数日後、その子はこの世を去った。私は一緒に掘った井戸のそばに佇んで、私の真心が届くようにと祈った。

日常に戻った私は、他の皆と同じように論文執筆に集中し、日々を過ごしている。このように日常の流れに身を任せ、無気力になっていた私にとって、財団への参加は単なる義務だったかもしれない。しかし、参加のための準備をしている最中、鏡を見ると、いつの間にか参加への期待感で顔がほころんでいた。久しぶりの笑顔だ。1度、2度、参加が重なることで、徐々に前向きに変わっていく自分が新鮮に感じられ、活動中の日々での仲間が、私にとって次第に大切な人々と感じられるようになっていった。

私の心の変化を、財団でもすぐに分かったようだ。

「顔が随分明るくなりましたね。」と、今西さんが気づいてくださった。

空虚だった私の心と疲れた心を黙々と支えてくれたのが、今年の私にとっての大きな変化だった財団の存在だと思う。私の姿をただ応援し励ましてくれ、私の帰るべき場所となってくれた財団があったからこそ、自分の道を歩むことができた。

世の中が変わっていく時、共に自分自身もそのような社会と似て変わってきたのではないか。今の自分に失望し、言い訳ばかりしていた。今までは過ぎ去る時の中で、この世に生を受けた意味への答えは見出せなかったが、やっとそれを見つけた気がする。

「現場で私を必要とする人と共に生きていこう」

国境なき医師団体での活動をより躊躇なく遂行できるようしっかりと支えてくれる渥美財団があることで、私は自分の人生の方向を決めることができた。人生への答えを見出すべく、ずっと1人で歩んできたと思っていたが、結局、だれかと共に歩むことでこそ真の意味を見出せることが、今やっと分かった。この発見が遅くなったことについての後悔よりも、感謝の気持ちが大きくなっている。

これからイギリスに戻り、研究員としての計画に取り組み、それが終わり次第また現場に戻ろうと思う。これが私の道だと信じて、いつか過ぎ去った時の中で答えを見出せなかったとき、誰かが「正しい道を1人で歩んできたか」と訊ねれば、答えられるだろう。「共に歩み、私を支えてくれた人がいる」と。そして、今までの過去に後悔はないと。

歩んできた道が善き道であるよう、そしてまたいつか善き影響力を及ぼすことができたらと願う。皆とこれから別の道を歩いていくことになるかもしれないし、アカデミーから遠のくこともあるかもしれない。それでも、皆の活動を遠くからでも聞き、知ることができれば、再び立ち上がる力を得られるだろう。

どんな私であっても財団を訪ねると、喜んで迎えてくれるという確信ができた。そしてこの確信は財団が私にくれたものだ。これからの私の進む道が財団への恩返しとなっていれればと願う。

用意しておいたお茶が冷めていく今、この手紙を締めくくろうとしている。この手紙を書き始めた時は名残惜しい気持ちでいっぱいだったが、2023年度同期の30周年イベントの写真が送られてきて、みんなの心が私に届いた今、再び明るい笑顔を浮かべてこの手紙を締めくくることができる。

静かでいつもより冷たい空気が漂っていた銀色の街ロンドンは、徐々に昇る陽ざしと共に金色に染まっていく。

「後輩たちに、私たちが過ごした暖かさに満ちたこの場所を譲るときがきた。皆に今のこの金色の光のように明るい未来が共にあることを願って...」